ＮＰＯ法人　ジェントルハートプロジェクト

ジェントルハート通信

Ｎｏ．４７　夏号
発行日　2015.6.5

『 修学旅行でエスカレートしやすいいじめ 』　理事　武田さち子

修学旅行の季節です。修学旅行はいじめが起きやすい、エスカレートしやすいので注意が必要です。

子どもが修学旅行に行きたがらないときには無理強いせず、じっくりと話を聞いてください。

教師は事前に、修学旅行にはどのようなリスクがあるかを話し合ったり、今まで起きた事件事故について広く情報収集し共有しましょう。いじめが可視化しやすいチャンスと捉え、子どもたちの様子を注意深く観察してください。

まずは班決めでの排除。あるいは班長などに推薦しながら、みんなで従わない、協力しないということもあります。

班決めで余ってしまった子どもがいる場合、教師はどこかの班に頼み込んで入れてもらうことをしがちですが、本人はとてもみじめな思いをします。

また、排除する側を増長させます。こういう時は、仲間はずれが出るくらいなら自由な班決めを禁止し、教師のほうで構成員を決めてください。その場合も、孤立している子どもが誰とであれば比較的うまくいくかを配慮して決めましょう。

修学旅行先で起きやすいいじめには、班行動や宿泊先での仲間外れ、小遣いの恐喝、風呂場や部屋で下着や裸の写真や動画を撮る、部屋での暴行などがあります。

とくに今は、数人でホテルの個室を利用することが増えているため、暴行や性的虐待などもエスカレートしやすいので注意が必要です。

普段は禁止されているスマホも持ち込み可になるため、暴行や性的虐待シーンを撮られて、脅されたり、サイトにUPされたり、仲間内で画像が回されたりすることがあります。

いじめが発覚したら必ず、画像を撮られていないかを確認してください。これを怠ると、ほとぼりが冷めた頃、ネットで公開されてしまうことがあります。

修学旅行後は写真にも注目しましょう。集合写真で一人だけ下や横を向いていたり、泣きそうな表情をしていたりする子どもはいませんか。みんなが笑顔のスナップ写真のなかで、暗い表情をしている子どもはいませんか。

2005年9月9日、北海道滝川市の小学校の教室で自殺をはかり、翌年1月6日に亡くなった松木友音さん(小６・12歳)は、修学旅行の班決めで排除され、宿泊先でもひとりぼっちでいる姿が目撃されていました。教師たちはいじめに気付きながら放置していました。結果、修学旅行直後に自殺を図りました。

2013年7月7日、長崎県長崎市の小学校の女子児童(小６・11歳)が自殺をはかって意識不明の重体になり、亡くなったケースでも、修学旅行の班決めで、クラス女子のほぼ全員から悪口を言われたり、排除されたりしていたことを知って、ショックを受けていました。

本来、仲間との楽しい思い出づくりになるはずの修学旅行で、子どもたちに辛くて悲しい思いをさせないでください。

発行
NPO法人
ジェントルハートプロジェクト

事務局
〒210-0843
川崎市川崎区小田栄1-8-3 青山
TEL＆Fax
045-845-3620(小森)
URL　http://npo-ghp.or.jp

会員登録及びｶﾝﾊﾟは随時受付中
正会員　1口　2,000円
賛助会員　1口　1,000円
郵便振替
口座番号:00200-8- 111295
口座名義:ｼﾞｪﾝﾄﾙﾊｰﾄﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ
振込用紙に会員の種別を明記下さい

目次:

巻頭コラム	Ｐ１
文部科学省への申し入れ	Ｐ２-３
第3回国連防災世界会議への参加そして大川小学校へ	Ｐ４-５
講演会の感想文から	Ｐ６
活動の報告と今後の予定	Ｐ７
橋がかかる	Ｐ８

ジェントルハート通信第４７号
定価100円（会員は無料）

◆ 文部科学省スポーツ・青少年局 学校健康教育課への申し入れ ◆　　理事　大貫隆志

2015年5月20日、ジェントルハートプロジェクトは、文部科学省スポーツ・青少年局 学校健康教育課に対して、申し入れを行いました。文部科学省からは学校健康教育課長の和田勝行さん、課長補佐の高井絢(じゅん)さん、係長の中出雅俊さんが出席。ジェントルハートプロジェクトからは、代表理事の小森新一郎、理事の武田さち子、篠原真紀、大貫隆志が出席しました。

今回の申し入れに関しては、参議院議員の小西ひろゆきさんが文部科学省との調整などに力を尽くしてくださり、さらに申し入れと、その後の記者会見にも同席してくださいました。

調査対象から外された
学校事件事故における自殺事案。

申し入れでの要望事項は、以下の2点。

1.調査研究対象に自死事案を含めてください。
2.事件事故災害後の対応の現状について、被災者や遺族から直接情報を吸い上げる仕組みをつくってください。

というのも、2015年2月に発表された「学校事故対応に関する調査研究 調査報告書」(以下、調査報告書)に記載されている調査結果が、ジェントルハートプロジェクトが独自に行ったアンケート(以下、法人アンケート)と大きく乖離しているためです。

「学校事故対応に関する調査研究 調査報告書」をまとめたのは国立大学法人 大阪教育大学。同大学は文部科学省から調査を受託し調査を行いました。これは、2014年10月から文科省が進めている「学校事故対応に関する調査研究」有識者会議(以下、有識者会議)での調査の一環であり、調査対象は、2013年度までの過去9年間に、学校管理下で発生した事故や災害の事例832件です。

和田勝行学校健康教育課長(右)に要望書が手渡された

調査対象となるデータは、独立行政法人日本スポーツ振興センター(以下、JSC)が死亡見舞金や障害見舞金の災害共済給付を行った事件事故災害832件。学校設置者に調査票を送付して行いました。

災害共済給付制度は、保護者と学校設置者の負担による一種の保険制度です。私たちが問題であると感じたのは、この調査で自殺事案が対象外とされている点です。

自殺事案を対象外とした調査では、学校事故対応の方向性がずれてしまうのではないか。

なぜ自殺事案が、調査の対象外となっているのでしょうか。調査報告書に目を通して私たちが感じる違和感の原因は、自殺事案が含まれていないためではないでしょうか。私たちはそのように考えました。

例えば調査報告書では、被災者への説明の項目に関して、次のような記述があります。

「被災した児童生徒等の家族への「学校側からの具体的な経緯の説明」

1 時間以内に64.2%、24 時間以内に計90.3%の割合で、説明が行われていた。

話した内容については、「事故概要・発生時の説明」が351 件で最も多かった。

一方、法人アンケートでは、

【事件事故の経緯や詳細についての説明】について
「その日のうち」が10件(19.6%)、
「1カ月以上たってから」が9件(17.6%)。
「いまだに説明がない」が14件(27.5%)。

【学校や教育委員会から、自発的な説明や報告はありましたか】の問いに、
自発的な説明や報告を受けた人は6件(11.8%)、
41件(80.4%)が「自発的な説明や報告はなかった」と答えている。

質問自体が異なるので、答えも違ってくるのは当然ですが、「調査報告書」では、短時間のうちに積極的に説明がされ、「法人アンケート」では、説明されないケースが30%近くあり、80%以上が自発的な説明や報告がなかったことを示しています。

なぜこれほどの開きが生まれるのでしょうか。理由は二つあります。一つは、「調査報告書」の回答者は学校または学校設置者であり、「法人アンケート」の回答者は被害当事者またはその家族・遺族という点です。もう一つは、「調査報告書」の事案は比較的軽微なものが含まれていることと、死亡事故の場合でも、ある程度保護者とのコミュニケーションがとれているケースであること、「法人アンケート」の事案は学校や教育委員会により隠ぺいなどが行われ、関係が悪化しているケースが多いことです。

被害家族・遺族間では、「学校は骨折などの事故については積極的に説明や謝罪を行うが、死亡事案となるととたんに態度を変え、情報の隠ぺいや捏造を始める」という認識が共有されています。こうした点から

考えると、「調査報告書」の扱う事案に自殺事件が含まれないことは、学校あるいは学校設置者の事後対応のあり方に関する調査研究を誤った方向に導く可能性があります。

有識者会議での調査研究から
JSC災害共済給付制度のあり方まで意見を交換。

申し入れ冒頭では、小森新一郎代表が学校健康教育課の和田勝行課長に要望書を提出、続いて武田さち子理事が趣旨を説明しました。

「調査報告書では調査対象から『故意による死亡』を除くと書かれているが、これは自殺を意味すると思われる。自殺は追いつめられた末の死であることは自殺対策基本法にも書かれていることであり、こうした認識は亡くなった子どもたちにも申し訳なく、再発防止にも役立たない」「調査報告書と法人アンケートの差が大きい。この乖離こそが、問題そのもの。なぜこれほど差が出るのかを、検証してほしい。当事者の意見を幅広く吸い上げていただきたい」と訴えました。

和田課長は、自殺事案を調査対象から除いた理由を「児童生徒の登下校中の痛ましい事故もあり、事件事故の対策を考え始めた。自殺に対しては、自殺対策基本法やいじめ防止対策推進法があるが、事件事故については、そういったスキームが全くないため、これに特化し、早急に結論を導く取り組みとした」と説明しました。

JSCのデータを元に研究を進めたのはなぜか、JSCデータには偏りがあるのではないかとの質問に対しては、高井絢課長補佐から「全国的な学校の状況をつかむには、まとまったデータが必要。JSCのデータはすべての事故を網羅したものではないが、長い年月のデータの蓄積があるので、これを選んだ。

『故意による死亡』は法律用語であり、自殺＝自分の意思によるものという意味で使っているわけではない」との解答がありました。

これに対して武田理事が再び、「学校保健安全法には、学校における保健や安全に関する最新の知見、事例を踏まえ必要な施策を講ずるとある。JSCの考え方自体が非常に古いもので、高校生になれば自分で判断できるため自殺を自ら選んだ死と捉えている。小中学校生に対しては、学校が原因の自殺に対しては給付対象とするよう2007年に決まったが、学校や教育委員会が、いじめや指導が明らかな原因と認めなければ給付されない問題がある」と指摘。

これを受けて小西議員が、「日本スポーツ振興センター法における災害の定義が、『学校管理下における児童生徒等の災害、負傷、疾病、傷害または死亡』であるならば、いじめ自死の場合、いじめが関係するとの判断があれば、死亡の段階で災害給付の対象と

申し入れ後の記者会見の様子

することができないのか。その方が、法の精神に合っているし、法解釈や政令の変更で対応できるはず」と発言しました。

調査報告書や調査のあり方に始まり、JSCの災害共済給付制度の運用面での課題まで、1時間の予定をオーバーして意見交換ができました。意見のずれは残ったものの、今後も継続して議論する約束もでき、一定の目的は達成できました。

しかし要望書の宛先に「学校事故対応に関する調査研究」有識者会議が含まれていたにもかかわらず、5月25日に開かれた有識者会議では要望書は提示されず、申し入れがあったことを知る委員から文部科学省担当者が抗議される場面もあったと聞いています。

ジェントルハートプロジェクトではこれまでも、学校事故・事件の再発防止には、不幸にしてすでに起きてしまった事故・事件を徹底的に検証し、効果的な対策を見いだしていかなければならないと訴えてきました。今回大きく報道されることもなかった申し入れでしたが、今後も継続してこの問題を訴えていきます。

◆

「学校事故対応に関する調査研究」有識者会議に関しては、フォトジャーナリストの加藤順子さんが、DIAMOND onlineに記事を書いています。

一連の大川小学校に関する記事の一環として書かれていますが、有識者会議が行う調査の問題点を鮮やかに描いています。ぜひお読みください。

学校事件・事故の対応実態を文科省が調査へ
遺族の不信感強い“大川小の検証”含まれず？
http://diamond.jp/articles/-/62219

◆ 第3回国連防災世界会議への参加　そして大川小学校へ◆

国際的な防災戦略について議論する、国連主催の第3回「国連防災世界会議」が３月１４日から東日本大震災の被災地、仙台市で開催され、当法人からも理事４名が参加して、お話をお聞きしました。

この会議は、国連加盟国１９３カ国の国際機関やＮＧＯなどが参加して、ホスト国日本の「防災ノウハウ」を世界に紹介する目的で開催されているものです。

この会議で私たちが最もお聞きしたかったのは「宮城県子ども支援会議」が主催する「東日本大震災に学ぶ大災害と子ども・子育て支援活動のあり方」というシンポジウムでの、大川小学校卒業生の皆さんのお話です。

震災当時、大川小学校５年生で実際に津波の被害に遭い、奇跡的に一命を取り留めた只野哲也さん（１５）、そして大川小学校卒業生の皆さんは、大川小学校を「震災遺構」として残して欲しいと、会場をぎっしり埋めた約２００人の参加者の前で、自分たちの意見をしっかりと語ってくれました。

只野さんは「まだ大川小の校舎を壊してほしいと思っている人がたくさんいます。私は絶対に多数決などで大川小の問題を決めてはいけないと、とても強く思っています。壊してほしい人と残したい人で、もっと意見を交わし合い、全員が納得できる方法にするためにも、私たちはこれからも地域の方々と話し合っていきたいと思います。

否定しない。強制しない。丁寧に向き合う。この３つを私は強く心がけ、私たちの母校を残したい思いをこれからも伝え続けます」と、大川小学校の校舎をたくさんの人に見てもらい、地震や津波の恐ろしさを後世の人々に語り継ぐきっかけになって欲しいと訴えました。

マグニチュード９.０、最大震度７の凄まじい揺れと、波高１０ｍ以上、最大遡上高４０ｍにも上る巨大な津波により、東北地方および関東地方の太平洋沿岸に壊滅的な被害を与えた東日本大震災。千年に一度と言われるこの未曾有の大震災を、千年先の未来の人たちにも語り継ぐために、これからも彼らは必死に訴え続けます。

【会議で発表する只野哲也さんと大川小学校卒業生の皆さん】

私たち部外者には、解体か存続かを議論し、意見する資格は無いのかもしれません。しかし「今は震災後ではない。震災前なんだ。次の震災はいつ来るのか誰にも分からない。千年先かも知れないし、明日かもしれない。」という被災者の方の言葉は、私たち一人一人に大きな課題を突きつけているように思えてなりません。

【ここねっと緊急支援チームの佐藤秀明先生と会場にて】

そして翌日、私たちは大川小学校を慰問するため再び石巻を訪れました。この地に立つのは二度目になります。大津波で周辺の建物が全て流されてしまった土地に、ポツンと残された大川小学校校舎。

休み時間には子どもたちの元気な笑い声が聞こえてきたであろう運動場に、今は鎮魂の慰霊碑が立ち、この地に訪れた多くの人々が涙し、手を合わせます。

地震発生直後、先生を先導に子どもたちは必死の思いで校庭に出て、この場所で５０分もの間、ひたすら次の指示を待ち続けました。３月中旬とはいえ、当日はまだまだ底冷えがするような寒さで、雪も舞っていたといいます。余震に怯え、子どもたちはどんな思いでその５０分を我慢したことでしょう。今、こうしてこの校庭に立ち、廃墟となってしまった校舎を見つめていると、胸が締め付けられて涙が止まらなくなります。

【大川小学校外観】

大川小学校は、すぐ傍を流れる北上川の河口から約５キロ上流に位置します。海岸線からも離れており、ハザードマップの想定でも津波被害地域からは外れていたそうです。しかし大津波はその北上川を遡上し、周辺の町や学校を全て呑み込んでしまいま

した。ちなみに学校付近の標高は、わずか１ｍしかないそうです。

【大川小学校慰霊碑】

「想定外」だと言ってしまえば、そうかも知れません。あれほどの大きな地震が突然やってくるとは、誰一人として想像しなかったことでしょう。しかし、津波が大川小学校を襲うのは、地震発生後５０分も経ったあとなのです。当時は大津波警報が発令されており、先生方もラジオでその情報は随時掴んでいました。そして学校のすぐ裏には、低学年の子どもでも楽に登ることが出来るような小高い山があります。実際に椎茸栽培の授業でも使い、子どもたちも頻繁に登っていたそうです。どうして先生方は子どもたちを、その安全な山に逃がしてくれなかったのか。あれほど「想定外」の大きな地震が来たのだから、この後襲ってくるであろう津波に関しても「想定外」の大きさを想像することは、それほど難しいことだったのでしょうか。

失われた児童７４名と教職員１０名もの尊い命を「想定外」という一言で片付け、闇に葬り去ってしまうのは、あまりにも短絡的で理不尽ではないかと思えます。

大川小学校の悲劇は、残されたご遺族だけではなく、今を生きる私たちに、震災の恐怖と、生き延びるための多くの知恵を残してくれました。

私たちは、犠牲になられた多くの尊い命を決して無駄にすることなく、これから生まれてくる次の命に語り継いでいく責任があるのだと、強く実感した二日間になりました。

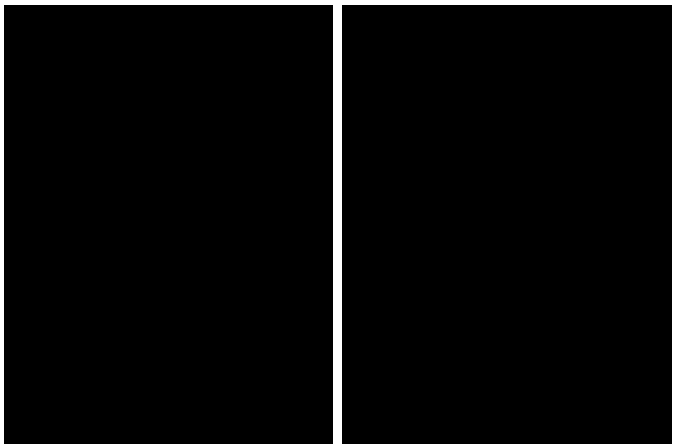
理事　篠原宏明

「 ひまわりのおか 」

２０１１年３月１１日。宮城県・石巻市立大川小学校を、大きな津波がおそいました。

わが子をなくしたお母さんたちは、やがて、小学校のそばにたくさんのひまわりを植えはじめました。日差しをあびて、ぐんぐん成長していくひまわりに重なるもの。

それは、何よりもたいせつな、愛する子どもたちの姿・・・・・。



ひまわりを植えたお母さんたちが、愛する我が子との思い出を描いた絵本です。

昨年８月、仙台で大川小学校のご遺族と共にシンポジウムを開催しました。その際に初めて大川小学校に慰霊に行かせて頂きました。

車を走らせ、最初に目に飛び込んできたのが、このひまわりの花畑でした。小学校からそれほど遠くない「三角地帯」と呼ばれる、子どもたちが避難しようとしていた場所です。

周りには建物も何も無く、黄色いひまわりがまるで子どもたちの笑顔のように見えました。

しばらくすると赤い屋根の小学校が見えて、途端に涙が溢れました。

校庭には、小雪が舞い散る中、寒さと恐怖に怯えながら膝小僧を抱えて座っている子どもたちが見えるようでした。

ご遺族に校舎の中や裏山を案内して頂き、帰り際にひまわりの種を頂きました。

今年のゴールデンウイークに種を蒔き、２週間ほどして可愛らしい芽が出てきました。

ひまわりの花は子どもたちの笑顔。心を込めて大切に育てます。

そして初秋に種ができたら、たくさんの方に託したいと思っています。

全国に大川小学校の子どもたちの笑顔を咲かせてあげたい。

ご協力いただけるようでしたら種をお譲りしたいと思います。

理事　篠原真紀

（ 連絡先　mail： shino_m@npo-ghp.or.jp ）

【ひまわりの芽】

◆ 講演会の感想より◆

私たちジェントルハートプロジェクトは、小・中・高校・大学の生徒さんをはじめ、教職員・ＰＴＡ・保護者、一般の方などを対象に、幅広く講演活動を行っています。

ご存じの通り、理事の中にはいじめ被害により大切な我が子を自死で亡くした者も居ます。自らの過去を振り返り、身を削りながら語る作業というのは非常に重く、辛い作業ですが、そんな私たちの背中を押し、応援してくれるのは、講演後、皆さんに書いて頂ける貴重なアンケート(感想文)です。

私たちの講演を聞いて頂き、その中から何かを感じ取って書いて頂く皆さんのアンケートは、私たちの宝物であり、私たちが進むべき指針となっています。

現在、法人Ｆａｃｅｂｏｏｋでは、不定期にこのような感想文を公開しておりますが、今後、この「ＧＨＰ通信」の中でも、様々な立場の方が書いてくださった感想文を、掲載して参りますので、皆さんにもお読み頂き、是非いじめ問題を考えるきっかけにして頂ければ幸いです。

第一回目は【中学３年生・女子】の感想文を記載します。
原文はかなり長いので、一部省略しながらの掲載になります。ご了承ください。

◆　今日はお忙しい中来てくださって、ありがとうございました。お話を聞いて、自分のことみたいだなぁと、思いました。

私は部活内で無視をされたり、悪口を言われたりしていました。私は運動が苦手で、人と上手に話せなかったり、直さないといけないところがあります。私の親にそれを言っても「お前が悪い」としか言われません。

確かに考えてみると、運動が本当にダメな私が運動部に入ったのがいけなかったのかもしれないです。

それに私の親は、すぐ私を殴るので本音は言えません。すごくつらいです。

だから私は二年生になって、運動部から合唱部に転部しました。

それでも、私に対する悪口や陰口は止まらず、変な噂まで流されたりしました。

私は死にたくて川に行ったこともあります。それぐらい、つらかったです。

三年生になると、私の悪口や陰口を言っていた子たちと同じクラスになってしまいました。

クラスに居るのはつらいので、休み時間には教室を出て別のクラスの友だちと会っていたけど、先生には「新しいクラスになじめないから、あまり会わないほうが良い」と言われ、今はほとんどクラスから出られません。すごく怖いです。

悪口や陰口はクラスの中でどんどん広まり、本当に私は生きてて良いのかとさえ思えてきました。私には良いところは無いんだと思えてきます。

普通に接してくれる子さえも、私のことを悪く思っているのかと思うと、笑えなくなります。どうしたらいいでしょうか？戦えばいいんですか？

自分の良いところを見つけられないです。先生には「見つけられる」と言われるけど、見つけられない私はクズです。

◆ 活動のご報告と今後の予定 ◆

日　付	主　催　者	都道府県	都市	人数
2015/6/1	子どもの人権をはぐくむ会	千葉	千葉	50
2015/6/2	川崎市立今井小学校	神奈川	川崎	310
2015/6/2	上智大学	東京	千代田	30
2015/6/8	三重県立南伊勢高等学校	三重	度会郡	
2015/6/10	長岡市立与板中学校	新潟	長岡	340
2015/6/12	新潟市立巻東中学区	新潟	新潟	370
2015/6/13	練馬区立石神井東中学校	東京	練馬	560
2015/6/17	姫路市立飾磨西中学校	兵庫	姫路	1,050

日　付	主　催　者	都道府県	都市	人数
2015/6/18	徳山工業高等専門学校	山口	徳山	763
2015/6/18	酒々井町人権教育セミナー	千葉	印旛郡	100
2015/6/22	新潟市立巻西中学区	新潟	新潟	410
2015/6/24	豊昭学園	東京	豊島	620
2015/6/25	河内地区PTA指導者研修会	栃木	宇都宮	230
2015/6/25	光泉中学校	滋賀	草津	330
2015/6/30	松原市人権教育研究会	大阪	松原	250
2015/7/1	堺港市立第一中学校	鳥取	境港	330
2015/7/3	野田市立東部中学校	千葉	野田	210
2015/7/4	八尾市立中高安小学校	大阪	八尾	250
2015/7/6	川崎市立菅小学校	神奈川	川崎	320
2015/7/7	野田市立南部中学校	千葉	野田	900
2015/7/9	霧島市立陵南中学校	鹿児島	霧島	
2015/7/10	霧島市立牧ノ原中学校	鹿児島	霧島	
2015/7/10	上都賀地区PTA指導者研修	栃木	日光	200
2015/7/11	藤嶺学園藤沢中学校	神奈川	藤沢	120
2015/7/12	グリーフ支援士研究会	東京	北区	10
2015/7/13	霧島市立牧園中学校	鹿児島	霧島	
2015/7/14	霧島市立舞鶴中学校	鹿児島	霧島	
2015/7/16	新潟市立潟東中学校	新潟	新潟	170
2015/7/16	野田市立木間ヶ瀬中学校	千葉	野田	350
2015/7/22	川崎市立学校人権尊重教育担当者研修	神奈川	川崎	180
2015/7/23	長門市人権教育セミナー及び夏季教育研修	山口	長門	200
2015/7/27	大東市人権教育研究協議会	大阪	大東	400
2015/7/28	吉田町子どものあんぜんセミナー	広島	安芸高田	200
2015/8/17	山梨県峡南地域人権講演会	山梨	南巨摩郡	400
2015/8/28	西武台千葉中学・高等学校教員研修	千葉	野田	70
2015/9/4	関東学院中学校	神奈川	横浜	300
2015/9/27	新潟県教育庁下越地区深めよう絆県民の集い	新潟	新潟	600
2015/9/30	豊昭学園	東京	豊島	620
2015/9/30	姶良市立重富中学校	鹿児島	姶良	100
2015/10/2	川越少年刑務所	埼玉	川越	
2015/10/16	島根県教育委員会	島根	安来	200
2015/10/27	米子市人権教育主任研修	鳥取	米子	70
2015/10/30	山口県教育委員会平成27年人権教育研修会	山口	山口	350
2015/11/6	川越少年刑務所	埼玉	川越	
2015/11/17	川崎市立田島小学校	神奈川	川崎	460
2015/11/19	千葉市PTA連絡協議会	千葉	千葉	
2015/11/24	横浜市立日限山中学校	神奈川	横浜	570
2015/12/12	世田谷区立北沢中学校	東京	世田谷	300
2015/12/18	熊本県立球磨工業高等学校	熊本	人吉	500
2016/2/25	光泉高等学校	滋賀	草津	390

◇ 橋 が か か る ◇

ここは毎回ジェントルハートプロジェクトに関わる方々の思いなどを自由にお書き頂くコーナーです。
今回は奈良県橿原市在住のいじめ自死遺族MKさんにお願いしました。

～～～調査結果によって見えてきたこと～～～

いじめ自死遺族　奈良県橿原市MK

親である自分よりも先に子どもが死ぬという事。絶対そんな事が起こるはずないと、当たり前に暮らしていた・・・あの日まで。2013年3月28日に、私たちの娘は「いじめ」を苦に自死に至りました。「みんな呪ってやる」という、およそ娘の言葉とは思えない言葉を残し登校のいつもの待ち合わせ場所で命を絶ちました。

学校や教育委員会は保護者（遺族）の味方になって、きちんといじめについて調べてくれるはず。学校や教育委員会は当然、保護者（遺族）の気持ちに寄り添ってくれるはず。そう思って疑わなかった私たちでした。しかし時間が経過すればするほど、ちょっと違う、いや全然違う、いやおかしい・・・。自死の原因を親に擦り付けようとしていました。そしていじめの証言なども隠していました。

精神的に追い込まれ、このままじゃ娘の死が闇に葬り去られ、私達が潰されると追い詰められ、思いついたのが「尾木ママに連絡したい」という思いでした。そして私たちのSOSを教育評論家・尾木直樹氏が察知して下さり、ジェントルハートプロジェクト（以後GHP）に繋いでくださいました。GHPが事件事故直後の初期対応について、法人のサイトにアップしてある事を教えてくださり、その内容から第三者調査委員会立ち上げのノウハウを知る事となりました。また、遺族となった私達に今後何が起こるのか、何をするべきかについての指針も得る事が出来ました。それと同時に公的権力を振りかざす相手と対峙しなくてはいけないという恐怖が襲ってきました。

あれから2年と2か月が過ぎました。当初から橿原市は、「いじめ防止対策推進法」を全く無視し恐ろしく酷い対応を私達に示してきました。独断で設置した調査委員会に市の顧問弁護士を訴訟対策の為に送り込み、遺族やその親族の戸籍を広範囲に「損害賠償請求訴訟提起準備の為」という理由で不正に取得していました。亡くなった娘の住民除票までも、この理由で。私たちは、絶対にこんな事認めてはならないと、何を食べて、いつ寝て、どんな暮らしをしていたのかも覚えていないくらい必死で抗いました。その結果、この調査委員会は消滅し、新しい第三者調査委員会が発足となりました。

現在、第三者調査委員会の調査報告書が提出されました。いじめについては≪本生徒への「いじめ」は優に認められ、その「いじめ」は、－中略―相当程度のものであったことが認められる。≫とし、そして橿原市・教育委員会・学校の事後対応については、森下豊市長が遺族と対立し、調査委の結論を有利にしようと働きかけたとして≪市長、そして同市長の判断を容認した市教育委員会の責任は極めて重大であり、子どもの自死を、汚れた大人の論理で弄んだことは誠に許し難いことである≫と痛烈に批判しました。学校・教育委員会については、≪本生徒の苦しみに救いの手を差しのべる具体的な対応をしなかった。そのことが本生徒に対する「いじめ」の継続を放置し、本生徒の孤立感を深めることに繋っていった≫と述べられています。

娘はもう帰って来ません。天真爛漫で、家族にとって太陽のような3姉妹の末っ子でした。まさか・・・まさか・・・なぜ、あんなに優しくて家族思いの娘が死を選ばなくてはいけなかったのでしょうか。亡くなったら、もうそれで終わりでしょうか？関わっていた生徒は全く反省せず線香もあげに来ず、その後も同じようないじめを繰り返し、何事もなかったかのように生きていっていいのでしょうか。そして、 担任は娘の死亡が確認された直後、「やっぱりクラスでの事が辛かったのかな。」と言いました。しかし、その後は口をつぐんでしまいました。

もう一度、言います。娘はもう帰って来ません。だけど大人がすべき事を見失ってはいけないと私は思います。自らの保身、組織としての防衛が先立って隠蔽をし、訴訟対策に力を入れたが為に調査委員会を再度作り直すという事態に陥った事の問題点は計り知れません。遺族と学校側に深い溝を作り、地域の保護者に混乱をもたらし、聞き取りなどの調査の着手が遅れたことにより記憶の劣化が生じ、真相解明を難しくし、再発防止が非常に遅れました。

もしも私のこの思いが教育関係者に伝わるならば、強くお伝えしたい事があります。先生たちも日々の業務が多忙で大変だと思います。だけど、時々休み時間の教室を覗いて下さい。お弁当や給食を食べている時、生徒をよく見てやって下さい。いじめられている子は、なにかサインを発しています。そして、様子のおかしさ、友人関係の変化などを察知して、まず弱いものに寄り添って下さい。様子を見るなど経過観察にとどまらず、保護者に伝えて連携をとって対処して下さい。お父さん、お母さんは子どもの一番の味方です。

私は娘が生きている時から担任に、「どんな小さい事でもいいので何かあったら連絡ください。」と常々伝えていました。その事について調査報告書ではこう記されていました。≪本件では、これまで述べたとおり、本生徒が急に元気をなくし、それまで親しくしていた友人らと離れて一人でいることが多くなっていたこと等本生徒の心身に顕著な変化があらわれていることが観察されており、それらの様子は、本生徒の心身の健康に何らかの顕著な変化が生じている可能性を窺わせるものであるから、学校としては、本生徒の上記変化の状態を母親に連絡、報告すべきであったように思われ、それによって本生徒の自死を食い止める手立ての一つになり得たものである。≫と。 当該中学校の多くの教職員が、元気をなくし友人から離れてひとりでいた娘の様子を把握していながら放置した結果、最悪の事態が生じました。

どうか、いまこれを読んで下さっている学校の先生方にお願いがあります。家庭から少し離れ学校の友人などにウェイトをおき始め、自立しようとし、反抗期とも重なる時期の思春期の子供は、いじめられていても親に言わないことが多く見受けられます。学校での生活は親には見えないことが多いのです。このような時期であることも十分理解していただいて、親に連携を求め共にいじめから救い出してあげて下さい。いじめ自死がもう一人としてなくなりますよう先生方のお力も必要だと考え、切にお願いいたします。